

Title	妊娠後期の父親と母親における親としての認識の違い
Author(s)	衣笠, 裕美; 栗山, 理香; 羽座, 典子 他
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2006, 12(1), p. 39-46
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/56798">https://doi.org/10.18910/56798</a>
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

—研究報告—

## 妊娠後期の父親と母親における親としての認識の違い

衣笠裕美\*・栗山理香\*・羽座典子\*\*・上田恵子\*\*\*・石井京子\*\*\*\*  
中嶋有加里\*\*\*\*\*・藤原千恵子\*\*\*\*\*

### DIFFERENCE OF THE PARENTAL RECOGNITION BETWEEN A FATHER AND A MOTHER IN LATE PREGNANCY

Kinugasa Y, Kuriyama R, Haza N, Ueda K,  
Ishii K, Nakajima Y, Fujiwara C.

#### 要 旨

育児を行う夫婦への効果的な育児支援方法を考える一助として、父親と母親の親としての認識について共通点と差異を比較した。対象は妊娠 28 週以降で初めての出産を迎える夫婦とした。回答は、属性は選択式、それ以外は文章完成法で求め、文章完成法は内容分析法で分析を行った。

両親ともに親になることに対する喜びを感じている反面、初めての育児に対する不安を抱いているというアンビバレンスな思いを持っている。しかし、父親は母親より実感がない分、具体的に育児などについて考えられておらず、母親は父親に対して夫としての精神的サポートを期待しているのに対して、父親はその重要性に気づいていないなどの差異も認められた。医療者は両親学級への参加を促進し、父母がお互いの気持ちを理解し、胎児が生まれる前に育児技術を習得できるように援助していくことが大切であると考えられる。

キーワード：妊娠後期、父親、母親、親としての認識

\*大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻前期課程 \*\*猿渡レディースクリニック \*\*\*奈良県立医科大学医学部看護学科  
\*\*\*\*大阪市立大学医学部看護学科 \*\*\*\*\*大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻

## I. 緒言

少子化、女性の社会進出など社会環境の変化に伴い、母親にとって一番身近な存在である父親の育児参加の必要性が社会全体で指摘されてきた。政府は1999年12月、少子化対策の具体的計画（新エンゼルプラン）を策定し、父親への妊娠出産に関する情報提供、啓発などを推進し、性別役割分業や職場優先の企業風土を是正する方向を示している<sup>1)</sup>。また、医療施設においては、両親学級や立会い分娩が増加し、父親が早期に親役割を取得し、積極的に育児に取り組めるような援助が求められている。しかし、男性は仕事、女性は家事や育児をするという性別役割分業意識は根強く、以前に比べ、父親の協力を得られるようになってきているとはいえ、母親が父親に比べ育児ストレスが高く夫婦関係の満足度が低く<sup>2)</sup>、依然として母親のニーズに合ったものではない。

これまで母性に関する研究は数多く行われてきている一方、父性に関する研究は徐々に増えてきている。しかし内容面で、父性意識の影響因子および父性意識の実態に集中し、父性の受容・形成過程についての研究は少ないという報告もある<sup>3)</sup>。育児を行う上で母性と父性は同じように大切なものであり、妊娠中から母親のケアだけでなく、父親のケアも重要となっている。より多くの父親が出産や育児に積極的に参加するようになれば、育児不安や母親の孤独感などがなくなり、育児を行う環境はよりよくなるのではないかと考える。父性は、一般に子どもが生まれたあとに、子どもに対する責任感として生じているものといわれている<sup>4)</sup>。本研究では、村上らの定義にあるように、父性とは「現に子どもを育てているもののほかに、将来、子どもを育てるべき存在、および過去においてその役目を果たしたものをいう」と定義し、男性のすべてを父性ということが出来る<sup>5)</sup>と考えている。

また、本研究では父母の認識について、選択式ではなく、文章完成法を用いて調査した。文章完成法とは、人間のもつ情緒的な傾向や態度、あるいは物事に対する関心や動機などを測定するときに用いられる。この方法は不完全な文章に、語句や文章を挿入して一つの文章を完成し、調査対象者のもっている心の状態を測定する方法である<sup>6)</sup>。この方法を用いたのは、父母それぞれのありのままが表現され、特に今まであまり研究されてこなかった父親の認識を理解するのに有用であると考えたためである。

## II. 研究目的

本研究の目的は、育児を行う夫婦への効果的な育児支援方法を考える一助として、まず初めての出産を迎える妊娠後期の父母を対象に、親になって思うこと、父親が配偶者から夫として期待されていると思うこと、母親が配偶者に対して夫として期待することについて、父親と母親の認識の共通点と差異を分析することである。

## III. 研究方法

### 1. 調査期間

2004年5月上旬～6月下旬

### 2. 調査対象

対象は、初めての出産を迎える現在妊娠中の夫婦198組とした。なお、対象の選択においては妊娠28週以降であること、妊娠経過に問題のないこと、夫婦がそろっていることを条件とした。

### 3. 調査方法

研究協力の依頼をしていた近畿圏内の2ヶ所の病院において、妊婦健診などのために来院した夫婦を対象に、研究の趣旨および研究内容を説明し、研究参加の了承を得た人のみに調査票を配付した。調査は夫婦それぞれに調査票を準備し、来院していない父親へは母親から手渡すという方法で行った。説明及び調査票の配付は、1ヶ所目の病院では助産師が、2ヶ所目の病院では研究者が行った。調査票は無記名で、夫婦で互いに相談することなくそれぞれの調査票に記入してもらい、夫婦別々の返信用封筒による郵送回収とした。

### 4. 調査内容

#### 1) 対象者の属性に関する項目

属性は、①夫婦の年齢②夫婦の結婚年齢③夫婦の就業状況④家族形態⑤親になる実感⑥今回の妊娠の予定である。

#### 2) 親意識に関する項目

親意識は、「親になることをわたしは」という刺激文の後に自由に記入してもらった。

#### 3) 夫としての期待に関する項目

夫としての期待は、①父親に対して「妻がわたしに対して、夫として期待していることは」②母親に対して「わたしが夫に対して、夫として期待することは」という刺激文の後に自由に記入してもらった。

回答は、属性に関する項目では選択式、親意識・夫としての期待に関する項目では、文章完成法で求めた。

## 5. 分析方法

属性はSPSSver11.5Jを用い統計処理を行った。文章完成法を用いた項目に関しては内容分析法を用いた。内容分析法とは、対象者が表現したデータをコード化したり分類したりするものである。この方法は、あくまでも得られたデータを分析していく中でカテゴリー化する、というところが特徴である<sup>7)</sup>。分析は以下の手順で行った。①文章完成法で記入された内容は1つの意味内容を1コードとして抽出する。②抽出されたコードは共通する内容のものを集め、サブカテゴリーとする。③サブカテゴリーはさらに共通内容ごとにカテゴリー分類する。④抽出及び分類過程においては、客観性を得るため、複数の者で別々に行い相互の一致性を図る。

## 6. 倫理的配慮

本研究は大阪大学医学部医学倫理委員会の承認を得て実施した。具体的には以下のようなことに配慮した。①調査票配付時には研究の目的、研究目的以外に使用しないこと、研究への参加は自由であり、不参加の場合でも診療に影響しないことを説明し、調査票にも明記した。②調査票の保管や処理に関しても、研究者以外の目に触れることがないようにした。③調査票は無記名、郵送回収とし、対象を特定できないようにした。④夫婦それぞれに参加の自由が認められるよう、返信は夫婦別々に行った。

## IV. 結果

調査票の回収は、父親31名(回収率15.7%)、母親38名(回収率19.2%)であり、文章完成法の欄に全く記載がなかった無効回答を除くと、有効回答は、父親27名(87.1%)、母親37名(97.4%)であった。また、文章完成法の分析結果は、カテゴリーを『 』で、サブカテゴリーを「 」で、コード例を( )で示した。

### 1. 対象者の属性に関する項目

父親の年齢は24~40歳で、平均31.7歳(SD4.2)であった。結婚年齢は23~39歳で、平均30.0歳(SD3.9)であった。就業状況は「就業者」27名(100%)であった。家族形態は「核家族」26名(96.3%)、「自分の親と同居または2世帯住宅」1名(3.7%)であった。父親になるという実感は「ある」12名(44.5%)、「少しある」11名(40.7%)、

「あまりない」3名(11.1%)、「ない」1名(3.7%)であった。今回の妊娠を「予定していた」18名(66.7%)、「予定外であった」9名(33.3%)であった。

母親の年齢は18~37歳で、平均28.4歳(SD4.4)であった。結婚年齢は18~37歳で、平均27.2歳(SD4.1)であった。就業状況は「専業主婦」26名(70.3%)、「就業者」11名(29.7%)であり、「就業者」11名中2名(18.2%)は「休職中」であった。母親の家族形態は「核家族」32名(86.5%)、「自分の親と同居または2世帯住宅」3名(8.1%)、無回答2名(5.4%)であった。母親になるという実感は「ある」15名(40.5%)、「少しある」19名(51.4%)、「あまりない」2名(5.4%)、無回答1名(2.7%)であった。今回の妊娠を「予定していた」24名(64.9%)、「予定外であった」12名(32.4%)、無回答1名(2.7%)であった。

### 2. 親意識に関する項目

父親が親になって思うことは、表1のように『親になることに対する喜びを感じている』『初めての育児に対する不安を抱いている』『親になる責任を感じている』などの7つのカテゴリーに分類できた。『親になることに対する喜びを感じている』には、「楽しみ」「嬉しい」「誇りに思う」などの5つのサブカテゴリーが含まれた。

母親が親になって思うことは、表2のように『親になることに対する喜びを感じている』『初めての育児に対する不安を抱いている』『親になる責任を感じている』などの9つのカテゴリーに分類できた。『初めての育児に対する不安を抱いている』には、「不安になる」「戸惑い」などの4つのサブカテゴリーが含まれた。

### 3. 夫としての期待に関する項目

父親が配偶者から夫として期待されていると思うことは、表3のように『育児への積極的な参加』『家計を支える』などの8つのカテゴリーに分類できた。『育児への積極的な参加』には、「育児参加」「乳児と遊ぶ」などの4つのサブカテゴリーが、『家計を支える』には、「収入を得る」「しっかり仕事をする」という2つのサブカテゴリーが含まれた。

母親が配偶者に対して夫として期待することは、表4のように『育児への積極的な参加』『互いに支えあう』などの12のカテゴリーに分類できた。

表1 父親が親になって思うこと

n=25

カテゴリー	サブカテゴリー	コード例
親になることに対する喜びを感じている	楽しみ	楽しみ(9)
	嬉しい	嬉しい(5)
	誇りに思う	父親になることを誇りに思う(3)
	親になることを望む	親になることを望む(1)
	幸せ	幸せに思っている(1)
初めての育児に対する不安を抱いている	不安になる	不安(4)
親になる責任を感じている	責任を感じる	重く感じている(1) 責任を負う(1)
		妻と子どもの責任をすべて受け止める(1)
親になることに対して実感がない	親になることに対して実感がない	あまり実感がない(1)
自分の親へ思いを寄せる	自分の親の気持ちが理解できる	自分の親の気持ちが理解できそう(1)
親になることを不本意だとは思わない	親になることを不本意だとは思わない	不本意だとは少しも思わない(1)
わからない	わからない	?(1)

注) ( )内はコード数

表2 母親が親になって思うこと

n=37

カテゴリー	サブカテゴリー	コード例
親になることに対する喜びを感じている	楽しみ	楽しみ(8) 心待ちにしている(3) 待ち遠しい(1)
	嬉しい	嬉しい(7)
	期待	期待(2)
	親になることを望む	親になることを望んでいる(1)
初めての育児に対する不安を抱いている	不安になる	不安(15) 自信がない(1) 心細い(1)
		テレビなどで、育児に悩む母親などを見ると、自分は大丈夫かなと心配になる(1)
	戸惑い	戸惑っている(2)
	怖い	怖い(1)
	まだ早いと思う	少し早いと思うことがある(1)
親になる責任を感じている	責任を感じる	責任を感じる(2) 責任の重さに押しつぶされそう(1)
	大人社会の一員となる	親になることでようやく大人社会の一員となる気がする(1)
親になることに対して実感がない	親になることに対して実感がない	実感できていない(3) 実感が薄い(1)
自分の親へ思いを寄せる	自分の親に感謝している	自分の親にも感謝している(1)
夫とならやっつけそう	夫とならやっつけそう	夫と二人でなら何とかやっつけいけると思う(1) 夫となら何でもやっつけいける気がする(1)
親になる心の準備はできている	親になる心の準備はできている	心の準備はできている(1)
できる限りのことをする	できる限りのことをする	夫と相談しながら、できる限りのことをする(1)
胎児が元気であれば良い	胎児が元気であれば良い	子が五体満足で元気であれば、他に心配することはない(1)

注) ( )内はコード数

表3 父親が配偶者から夫として期待されていると思うこと

n=21

カテゴリー	サブカテゴリー	コード例
育児への積極的な参加	育児参加	子守り(1) 積極的な育児(1) 子育てを妻任せにしない(1)
	乳児と遊ぶ	子どもと遊ぶ(1)
	乳児と妻の十分な相手をする	子、妻ともに十分な相手をする(1)
	乳児をサポートする	子どものサポート(1)
家事への積極的な参加	家事を手伝う	家事を手伝う(2)
家計を支える	収入を得る	金銭面(1) 家にお金を入れる(1) 安定した収入(1) 経済的に豊かになる(1)
	しっかり仕事をする	仕事(1) 仕事をして生計を立てる(1)
健康でいる	健康でいる	健康管理(1) 健康でいる(1) ずっと元気である(1)
夫婦関係が良好であるように配慮する	信頼関係を築く	常に信頼しあえる関係を築く(1)
	仲良く過ごす	夫婦がいつまでも仲良くいられる(1)
今のままでよい	今のままでよい	今のままでいい(2)
妻をサポートする	妻をサポートする	色々な手伝い(1)
わからない	わからない	?(1)

注) ()内はコード数

表4 母親が配偶者に対して夫として期待すること

n=37

カテゴリー	サブカテゴリー	コード例
育児への積極的な参加	育児参加	子育てに協力してほしい(4) 育児面で自立(1) お風呂は必ず入れてほしい(1)
	乳児を可愛がる	子どもを可愛がる(2)
家事への積極的な参加	家事をする	里帰り出産をするので、少しは家事ができるようになってほしい(1) 家事で自立(1)
	家事を手伝う	私が育児に疲れたとき家事を手伝ってほしい(1) たまに家事を手伝う(1)
家計を支える	収入を得る	金銭面で自立(1) 安定した収入を得る(1)
	しっかり仕事をする	仕事を頑張る(1)
健康でいる	健康でいる	健康でいる(2) 長生き(1) 今のまま健康で長生きしてほしい(1)
夫婦関係が良好であるように配慮する	気遣ってほしい	もう少し気遣ってほしい(1)
	仲良く過ごす	いつまでも仲良く過ごす(1)
	話をたくさんする	休日にはたくさん話をする(1)
今のままでよい	今のままでよい	今までどおり優しく、思いやりのある夫である(3) 今のまま変わらない(3) いつまでも仲良く暮らしていけるように、今のまま私を大事にしてほしい(1)
互いに支えあう	協力しあう	協力し、助け合う(2) 仕事が大事なのはわかるが、家の中のことも一緒に考えてほしい(1)
	支え	精神面での支え(2) よきパートナー(1) よき相談相手(1) 疲れたときや困ったときのサポート(1)
家族を大切にする	家族を守る	家族を守る(1)
	家庭に責任を持つ	家庭に責任を持つ(1)
	家庭を大事にする	このまま家庭を大事にする(1)
家族メンバーとしての意識を持ち続ける	家庭は個人と個人で成立するという意識を持つ	家庭は個人と個人で成立するという意識をしっかりともつ(1)
	感謝の気持ちを互いに持ち続ける	常に感謝の気持ちをお互いにもつ(1)
楽しい生活を送る	楽しい生活を送る	子どもも含め、仲良く楽しく笑いのある生活を送る(1) 毎日楽しく過ごす(1)
たくさん思い出を作る	たくさん思い出を作る	たくさん思い出を作る(1)
真面目に頑張る	真面目に頑張る	真面目にコツコツ頑張ってほしい(1)

## V. 考 察

本研究では、回収率が父母ともに20%を下回っている。その理由として、文章完成法であったことや質問項目が多かったことが考えられる。さらに、妊娠後期で出産が近づいた忙しい時期であったことや夫婦別々の返送としたが、夫婦そろって回答しなければならないという意識が働いていることなどが考えられる。

本研究の対象者の結婚年齢や年齢は、2002年の平均初婚年齢や年齢分布<sup>8)</sup>とほぼ同様で平均的な夫婦と考えられる。父親は全員就業しているが、母親は専業主婦が多く、父親が家計を支えている。雇用均等政策研究会報告書によると末子の年齢が3歳以下の世帯の母親の就業者率は3割弱であり<sup>9)</sup>、本研究の母親の就業率と変わりがない。両親のほとんどが核家族であり、全国の核家族世帯の割合(68.0%)<sup>10)</sup>よりやや高い傾向にある。これは、父親が積極的に育児参加しなければ、母親の負担が大きくなることを示している。母親の主観的健康観や疲労感と父親の育児参加との間に有意な関連性が認められ<sup>11)</sup>、特に、就業している母親にとって、父親の育児参加による育児負担感軽減の影響は大きいと考えられる。また親になる実感は、両親とも「ある」が40%以上で、「すこしある」を加えると80~90%と高い回答が得られている。父親の実感が得られる時期は70~80%は出生後であるという報告<sup>12, 13)</sup>と比較すると、妊娠後期とはいえ出産前からすでに親としての意識を持っている父親からの回答であると考えられる。また、今回の妊娠を予定していた者が、父母とも6割以上であることも、親になる実感を得やすくしていると思われる。

母親が妊娠に喜びを感じ、胎児を大切にしている態度は、すでに母性愛の芽生えが確認されているものといえるという報告<sup>14)</sup>があるが、具体的な記載内容では、『親になることに喜びを感じている』が両親とも共通して抽出されていることから、母性愛や父性愛が芽生えはじめていると思われる。さらに母親では、父親に比べて『親になる心の準備はできている』や『できる限りのことをする』など前向きな親としての意識が伺える。これは、出産を間近に控えた母親が、身体的な面からの出産に対する心構えもできかけており、親になるという実感を父親よりも具体的に得ているからと考えられる。対象が妊娠28週以降の母親であることから自然な意識であると思われる。

その反面、両親とも『初めての育児に対する不安』や『親になる責任を感じている』が共通して抽出されており、喜

びと同時に不安や責任という複雑な心理状態であることが推察できる。対象の80%が核家族であり、初めての育児を不慣れた両親だけで取り組んでいくことに不安を感じていると思われる。これらに対しては、両親学級への受講時に、初めて出産・育児に向かう両親が、他の両親とともに妊娠・出産・分娩・育児を学習するグループを通して、普段家庭において話し合えないようなことを夫婦で話し合い、相互理解をはかるようにすすめることが必要である。また、経産婦やその夫との交流や地域でのつながりを意図的に企画することで、より体験者からの助言や継続したサポート体制が得られるようにすることも重要である。一方、親としての意識を十分感じている親もいるが、『親になることに対して実感がない』という両親も存在している。このことは、早期から胎児への関心が得られるような援助も個々のケースに応じてすすめられる必要があるということを示している。特に、父親の場合は、母親に比べて間接的にしか胎児の存在を確認できないために、親としての実感が得にくい状況にある。佐々木ら<sup>15)</sup>は、胎児への関心が深まることで、より胎児へのかわりが増え、胎児の存在を実感できると報告している。

父親が「夫として期待されていること」について、父親の自覚と母親からの期待を比較すると、育児や家事への参加、経済的な支え、健康、夫婦関係のよさ、さらに子どもができて現在のままでありたいということは共通した認識であった。これから子どもが加わる家庭生活において、父親は自分に何が期待されているかは十分に認識していると考えられる。これらの期待内容は、現在のところ夫婦間のずれはみられない。しかし、母親では、さらに、相互に支え合うや家族としての連帯意識などの精神的サポートを期待している。この点については、父親はあまり意識しておらず、両者のずれがみられている。また、精神的サポートは、実際に育児が始まった後にも、母親のニーズとして高くなる割には父親の関心度や実行度が少ない行為である<sup>16)</sup>ために、夫婦間でのずれが生じて、不満につながりやすい内容である。妊婦の興味・関心は次第に出産・育児に向けての心の準備を整える方向に向かい、胎児とともに暮らすような精神状態が生まれる。この段階の父親は、妊婦が安心してそのような状態を楽しむことができるように、妊婦や胎児を支えるような心理的・社会的な環境を保ち守ることに大きな役割を果たす<sup>17)</sup>必要がある。そのため、医療従事者は、両親学級などで、父親に対して母親の精神的サポートの重要性を伝えていく必要がある。また、母親は父親に対して、家族として協力していきたいという

期待を抱いていることもわかった。反対に、父親は、『家計を支える』ことを期待されていると回答した者がおり、新しく家族を迎えての生活において経済的に支えていく役割を担っていると認識している。男性はもともと仕事という社会的立場があり、結婚により夫という役割が加えられ、さらに妻の妊娠で父親という役割を期待される。父親は、自ら親になることで仕事に対してより責任を感じるとともに、妻からの夫や父親としての期待にも応えていかなければならず、親としての責任は女性以上に感じてしまうと考えられる。そのような父親に対して、医療従事者からの精神的サポートを充実させたり、父親が育児に参加できる時間に帰宅できるようにするための取り組みを行うなど、父親を取り巻く社会的な基盤整備をしたりする<sup>14)</sup>ことで、母親への精神的サポートを行いやすい環境を作る必要がある。このことは、妊娠中の精神的な支えとしての父親の役割が重要なことは、母親の精神的状態と乳児の発育状態の関係を示す研究により明らかである<sup>18)</sup>ため、非常に大切だと思われる。

また従来型の男女の役割分担に同感しない人の割合は高まってきているものの、女性は就業していても『家事』や『育児』をきちんと行うべきだと考える人の割合は依然として高いと報告されている<sup>19)</sup>。本研究の対象においても、父親に対しては『家計を支える』ことへの期待があり、母親の70.3%が専業主婦であることを考慮に入れると、性別役割分業状況がまだまだ根深く残っていることが示されているといえる。

母親は、子どもが加わることで楽しみや思い出を作り、家庭の充実を図ることも父親に期待している。全体的に母親のほうが、具体的な生活場面を描いている。これは、親になる意識は、父親は母親より楽天的、母親は父親より現実的といえるという報告<sup>15)</sup>からも理解できる。また、父性の発達を助長するものとしては、良い父親になれるよう努力しようとする男性自身の意欲、さらに良好な夫婦関係や妻に対する思いやり、妻との関係において夫としての役割意識を有していることが重要であると報告されている<sup>20)</sup>。また、川井ら<sup>21)</sup>は、父親の育児における役割を明らかにしながら、母親の役割とうまく調和し、家庭の養育機能を高めていくのがよいと指摘している。

本研究の限界は次の2点が挙げられる。一つ目は、回収率が低かったという点である。これは一部の熱心な父母からの回答に偏っている恐れがある。二つ目は、調査を行った2ヶ所の病院とも、近畿圏内にあり、地域の特徴に偏りがある点である。地域の特徴が似ていれば、文化的な影響

を受けている可能性がある。今後、様々な地域で、対象を広げて分析していく必要があると考えられる。

## VI. 結論

本研究によって以下のことが明らかになった。

①父母は、親になることに対する喜びを感じている反面、初めての育児に対する不安を抱いているというアンビバレンスな状態である。

②妊娠後期においては、親になることに対して実感がない者もいる。

③父親に期待されていることは、育児や家事への参加、経済的支え、健康、夫婦関係のよさについてであり、父親の自覚と母親の期待は一致していた。

④母親は父親に対して精神的サポートを期待する反面、父親は意識しにくい状況にある。

⑤母親のほうが父親よりも具体的な生活場面を描いていた。

以上のことから、医療従事者は、両親がともに病院に来て、援助のきっかけとなる両親学級への参加を促進し、父母がお互いの気持ちを理解し、お互いの支えとなれるように、さらには、胎児が生まれる前に育児技術を習得できるように援助していくことが大切である。医療従事者は、父親も育児に積極的に取り組めるように、母親だけでなく、父親に対しても直接援助することが求められている。

## 謝辞

本調査にご協力頂き、ご回答下さったご夫婦の皆様には深く感謝いたします。また、本調査にご協力下さった病院関係者の皆様には深い謝意を表します。

## 文献

- 1) 厚生統計協会 (2004) : 厚生指標・国民の福祉の動向, 51(12).
- 2) 宮本政子 (2004) : 乳幼児を養育する父親及び母親の育児ストレスの関連要因と対処行動, 平成15年度香川大学医学部重点化経費研究(競争重点経費)および香川小児看護研究会活動報告「小児と家族の健康管理および病氣対処行動に関する研究, pp129-135.
- 3) 白井雅美, 渡部節子, 谷崎恵 (1996) : 父性意識に関する文献研究—看護・医学領域に視点をあて—, 母性衛生, 37(2), pp283-288.
- 4) 松本清一編集 (1999) : 系統看護学講座専門23 母性看護学1, 東京:医学書院.



- 5) 上由希子, 内山忍, 川越展美他 (1995): 妻の妊娠期における父性性(第1報)-父性性を構成する要因-, 母性衛生, 36(2), pp250-258.
- 6) 石井京子, 多尾清子 (2002) ナースのための質問紙調査とデータ分析, 東京: 医学書院.
- 7) クラウス・クリッペンドルフ, 三上俊治他訳 (1989): メッセージ分析の技法, 東京: 勁草書房.
- 8) 厚生統計協会 (2004): 厚生 の 指標・国民衛生の動向, 51(9).
- 9) 雇用均等政策研究会報告書, 2005/09/16 現在  
[http://www2.mhlw.go.jp/kisya/josei/20000217\\_03\\_j/20000217\\_03\\_j\\_houkoku.html](http://www2.mhlw.go.jp/kisya/josei/20000217_03_j/20000217_03_j_houkoku.html)
- 10) 児童のいる世帯の状況, 2005/09/16 現在  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa03/1-4.html>
- 11) 岡本絹子, 中村裕美子, 山口三重子他 (2002): 乳幼児をもつ母親の疲労感と父親の育児参加に関する研究, 小児保健研究, 61(5), pp692-700.
- 12) 宮中文子, 松岡知子, 大城洋子他 (1993): 父親の育児参加と意識との関連, 母性衛生, 34(1), pp57-63.
- 13) 西野美華子, 森口貴子, 山口智香子他 (1993): 妊娠・出産・育児期における父性意識の変化-初めて子供を持った父親への実態調査から-, 愛知母性衛生学会誌, (11), pp5-10.
- 14) 平井信義 (1978): 母性愛の研究, 東京: 同文書院.
- 15) 佐々木くみ子, 植田彩, 鈴木康江他 (2004): 親となる意識の構造とその影響要因に関する調査研究, 米子医学雑誌, 55(2), pp142-150.
- 16) 藤原千恵子, 日隈ふみ子, 石井京子他 (1996): 乳児をもつ父親の養育態度の形成に関する研究, 小児看護, 19(13), pp1774-1781.
- 17) 小此木啓吾, 持丸文雄 (1988): 周産期の臨床と父親の役割, 周産期医学, 18(1), pp115-119.
- 18) 南野知恵子 (1989): 父親の役割, ペリネイタルケア, 8(4), pp79-85.
- 19) 平成 13 年度国民生活白書, 2005/09/16 現在  
<http://www5.cao.go.jp/j-j/wp-pl/wp-pl01/html/13101300.html>
- 20) 山本聖子, 内山忍, 川越展美他 (1995): 妻の妊娠期における父性性(第2報)-妊娠前・中期と後期における父性性の変化-, 母性衛生, 36(2), pp259-265.
- 21) 川井尚, 庄司順一, 横井茂夫他 (1990) 育児における父親の役割に関する研究-総括報告-, 平成2年度厚生省心身障害研究「高齢化社会を迎えるにあたっての母子保健事業策定に関する研究」研究報告書, pp151-155.